常在菌検出例で深頸部膿瘍から縦隔炎をきたした一例（抄録）

内村　加奈子　　余田　敬子　　北嶋　　整　　新井　寧子
東京女子医科大学附属第二病院耳鼻咽喉科

今回われわれは深頸部膿瘍に発展した扁挑周囲膿瘍で術中培養が常在菌だったにもかかわらず術後縦隔炎を発症した症例を経験したので報告する．この症例は腫脹が主で炎症所見が乏しいため非定型的な経過をたどり重症化した例である．症例は72歳男性，1月7日ごろより頚部腫脹自覚，急に増大し嚥下障害出現し，近医受診．その晩食事摂取困難を主訴に救急車にて前医受診，入院となった．4日間摂食不可のため上部内視鏡施行，下咽頭癌疑われ，1月23日当科紹介受診となった．初診時所見は，下顎の腫脹，咽頭は側索の浮腫のみであった．造影頚部CTを施行，air bubbleを伴う膿瘍が下咽頭から舌骨，甲状軟骨，おとがい窩に及んでいたため，当院に即日転院し，同日，排膿目的に気管切開後右扁桃摘出術施行した．術中培養は常在菌のみであったが，術後縦隔炎発症．抗生剤投与と10日間の排膿の後軽快退院した．